

Title	ジェイムズ・ボールドウィン基礎研究：伝記3
Sub Title	James Baldwin : a critical biography 3
Author	辻, 秀雄(Tsuji, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Keio University Hiyoshi review of English studies). No.78 (2023. 9) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20230930-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジェイムズ・ボールドウィン基礎研究 ——伝記3

辻 秀 雄

本プロジェクトは、アフリカ系アメリカ人作家ジェイムズ・ボールドウィン (James Baldwin) を主題としたモノグラフ執筆を準備する基礎研究である。同書は、作家の紹介ののち、続く各章で長編を一本ずつ論じていく構成をとる。その作家紹介部にあたる伝記研究を成すのが本稿である。

伝記3は公民権運動時代を扱う。ボールドウィンが公の顔として、一躍名を馳せる時期となる。公的活動と創作の均衡をどう保つかという問題は、あとに来る「南仏時代」へと連続する課題となる。

公民権運動時代 (1957–1969 年)

伝記2の後半でみたボールドウィンの1957年発表のエッセイ, “Princes and Powers” はマーク・トウェイン (Mark Twain) の小説, *The Prince and the Pauper* (1881) のその題をもじったものであろうが, ネグリチュード運動のリーダーすなわち王子たちと, その権力すなわちリーダーシップについてのエッセイという意図がこめられていると解釈できる。その意味では, 社会運動のリーダーシップ論でもあったわけだ。そしてボールドウィンは, アフリカ系アメリカ人たちの権利獲得闘争である公民権運動の, 指

導者とは言わないまでも「最も人目に付くスポークスマン」として、運動の矢面に立っていくことになる (Pavlić 23)。

ボールドウィンの1957年の帰国に先立って、アメリカ国内の社会変革はすでに激化していた。アフリカ系アメリカ人の権利保障が打ち出されると、それに対する反動が巻き起こるのである。事実、公共教育における人種隔離を違憲とした最高裁判所の判断、ブラウン対教育委員会判決に反対する白人至上主義者たちは1954年7月11日にミシシッピ州インディアノーラ (Indianola, Mississippi) で集会を開き、白人市民会議 (the White Citizens' Council) を結成した (Gates, *Life* 325-26)。こうした改革と反動の応酬には、教育現場での具体的事件が多く含まれていた。たとえば、ブラウン判決の2年後、1956年2月にアフリカ系アメリカ人女子学生オーザリン・ルーシー (Aurtherine Lucy) がアラバマ大学 (University of Alabama) へ登校を始めるも、すぐに暴動が発生し、彼女は放校処分にあってしまう (Leeming 116)。伝記2の終盤でみたウィリアム・フォークナー (William Faulkner) の発言は、このアラバマ大学での騒ぎを念頭に置いたものであるが、白人側の暴力的な抵抗には目を見張るものがあった。

人種差別暴力の典型的な形であるリンチの最も凄惨な例もまた、この時期に起きている。エメット・ティル (Emmett Till) 事件である (Leeming 116)。1955年8月、シカゴ (Chicago) に住む14歳のエメット・ティルがミシシッピ州のマネー (Money, Mississippi) という小さな町に親戚を訪ねた。南部社会の習慣に疎かったのか、彼と住人の白人女性との間で何らかの出来事があった。ほんの些細なことだったのかもしれないが、それは南部社会におけるタブーであり、その白人女性の夫ともう一人の男性に連れ去られたティルは、数日後に遺体となって発見される。当時の南部における同種の事件と同様、二人の白人男性には無実の判決が下された。しかも二人は裁判後、ティルに行った所業を雑誌に売り渡したのである。ティルの母親はこの事件を世に知らしめるために棺の蓋を開けて葬儀を行い、めちやくちやくに殴打されたティルの遺体の写真が雑誌に掲載されたことで、

南部社会の異常さがアメリカ全土に広まった (Gates, *Life* 327–28)。この事件に衝撃を受けたボールドウィンは、のちに戯曲、*Blues for Mister Charlie* (1964) を執筆する。

エメット・ティルの場合のような市井のアフリカ系アメリカ人を対象にしたリンチ事件だけではなく、公民権運動に携わる著名人たちを標的とした暴力もまた、勢いを増した。1955年12月のローザ・パークス (Rosa Parks) の逮捕をきっかけに始まったアラバマ州モンゴメリー (Montgomery, Alabama) のバスボイコット運動では、マーチン・ルーサー・キング・ジュニア (Martin Luther King, Jr.) 牧師が指導者として頭角を現し、公民権運動を指揮していく。しかし、直後の56年1月、そのキングの家が爆破される (Leeming 116)。それでもキングらは教会関係者を中心に公民権運動の組織化を試み、それは1957年1月の南部キリスト教指導者会議 (Southern Christian Leadership Conference; SCLC) の設立につながるのであるが、その過程で、会議関係者の自宅や教会が度々爆破された。キング主導の非暴力不服従を旨とする運動を迎えたのは、一層過激化する暴力だったのである。

1957年7月に帰国したボールドウィンは、しばしのニューヨーク市 (New York City) 滞在ののち、南部へと旅立つ。*Partisan Review* および *Harper's Magazine* からの援助を受けた取材旅行である。その成果が、ともにエッセイ集、*Nobody Knows My Name* (1961) に収められることとなる、“A Fly in Buttermilk” (*Harper's Magazine* 掲載時の題は “The Hard Kind of Courage” (1958)) と “A Letter from the South: Nobody Knows My Name” (1959) である。“A Fly in Buttermilk” の冒頭、「常に南部に恐怖を抱いてきた」と告白するボールドウィンだが (*Collected Essays* 187)、本エッセイ以降、公民権運動時代の回想を含む自伝的エッセイ集 *No Name in the Street* (1972) そして南部を主要舞台の一つとする最後の長編小説 *Just Above My Head* (1979) にいたるまで、南部を語る彼の文章には常に不安や恐怖がにじみ出ている。その背景には、エメット・ティル事件や、公民

権運動指導者が直面してきた度を越した妨害といった南部社会の異常な人種差別暴力があることは確かだ。実際、ボールドウィンが親交を持ったメドガー・エヴァーズ (Medgar Evers)、マルコム X (Malcolm X)、キングは次々に暗殺されていくこととなる。エヴァーズは1963年6月12日、マルコム X は1965年2月21日、キングは1968年4月4日のことである。この三人に対するボールドウィンの想いは特に深く、*No Name in the Street* 所収の“To Be Baptized”や未完の*Remember This House*——ラウル・ペック (Raoul Peck) 監督によるドキュメンタリ映画*I Am Not Your Negro* (2016) の原作——において三人の死が悼まれている。ボールドウィン自身、いつ自分も凶弾に倒れることがあってもおかしくないという思いにとりつかれたとして、不思議はない。

ボールドウィンは、旅の準備として、南部事情に詳しいケネス・クラーク (Kenneth Clark) から情報をえ、またワシントン DC (Washington D.C.) にてスターリン・ブラウン (Sterling Brown) からアドバイスをえた。9月、ニューヨークを出発したボールドウィンが訪問したのは、ワシントン DC に続き、ノースカロライナ州シャーロット (Charlotte, North Carolina)、ジョージア州アトランタ (Atlanta, Georgia)、アラバマ州バーミンガム (Birmingham, Alabama)、アーカンソー州リトルロック (Little Rock, Arkansas)、アラバマ州タスキーギー (Tuskegee, Alabama)、モンゴメリー、テネシー州ナッシュヴィル (Nashville, Tennessee) などであった。シャーロット、リトルロックではブラウン判決後の公立学校での人種統合とそれがもたらした騒動に巻き込まれたアフリカ系アメリカ人の生徒たちを訪ねてインタビューをし、その他の諸都市ではマーチン・ルーサー・キング・ジュニア、キング夫人コレッタ (Coretta) ほか公民権運動の指導者たちと面会を果たしている (Leeming 138-47)。

このようにして公民権運動の渦中に身を置くようになったボールドウィンだが、1960年5月の二度目の南部旅行において、運動に正式に関わっていくようになる。その背景として、ボールドウィンが度々大学などでの

講演依頼を受けるようになっていたことを押さえておく必要がある。たとえば1959年6月には、タミメント・インスティテュート (Tamiment Institute) で “Mass Culture and the Creative Artist” と題された講演を行っている。同講演で、ボールドウィンは、真実を見定めることをしようとしないうアメリカ社会に警鐘を鳴らしつつ、芸術家は「神話を取り除き、歴史を提示する」すなわち真実を語るべき存在であることを説いた (Leeming 163; 同講演は *The Cross of Redemption* に収められている)。夏にパリ (Paris) に戻り、かつ秋にはストックホルム (Stockholm) に映画監督のイングマル・ベルイマン (Ingmar Bergman) を訪ねたボールドウィンは、1960年初頭にまたアメリカに帰ってくる¹⁾。同年には、ミシガン (Michigan) 州のカラマズー大学 (Kalamazoo College) に招かれ、のちにエッセイ “In Search of a Majority” (*Nobody Knows My Name* 所収) となる講演を行っている (Leeming 172)²⁾。カラマズーのように白人学生の比率が圧倒的に高い大学だけではなく、アフリカ系アメリカ人系の大学でも講演を行っている。1960年5月に再訪した南部では、フロリダ州タラハシー (Tallahassee, Florida) を訪ね、同地のフロリダ A&M 大学 (Florida Agricultural and Mechanical University) で討論会に参加するとともに、シットイン運動やデモ集会などの学生運動について取材を行っている。このタラハシー訪問はエッセイ, “They Can’t Turn Back” につづられているが、知り合ったある学生とのやりとりを通じて、若者の成長には尊敬できる年長者の存在が必要であると書かれている (*Collected Essays* 631)。また、タラハシー所在の白人大学のフロリダ州立大 (Florida State University) と A&M 大の連合人種平等会議 (the Congress of Racial Equality; CORE) 集会に関与することとなった。後日ボールドウィンは CORE に加入するとともに、学生非暴力調整委員会 (Student Nonviolent Coordinating Committee; SNCC) のメンバーにもなる (Leeming 174-75)。こうした機会を振り返り、ボールドウィンは自分が「正式に公民権運動に関わることになった時点」と定めている。「南部の学生たち」が「自分をつかみとった」と表現するボールドウィンが、若い世代の

育成に深い関心を寄せていたことを物語る (Eckman 154-55)。事実ボールドウィンは、1970年代および80年代、公的な活動から距離を置いたのちも、大学で講義を持ち、若者世代との交流は続けている。

アカデミックな場だけではなく、ラジオやテレビというマスコミ媒体への出演も増え、ボールドウィンの露出は一層高まっていく (Campbell 144-45)。たとえば彼は、1961年1月、ラングストン・ヒューズ (Langston Hughes)、ロレイン・ハンズベリー (Lorraine Hansberry)、アルフレッド・ケイジン (Alfred Kazin)、エミール・カポーヤ (Emile Capouya)、ナット・ヘントフ (Nat Hentoff) らとラジオシンポジウム、“The Negro in American Culture”に参加している (Leeming 159)³⁾。また、1961年4月には、マルコム X とテレビ討論に続きラジオ対談を行っている (Buccola 134-41)。同年7月に出版された第二エッセイ集 *Nobody Knows My Name* が好評を博したこともあり、ボールドウィンの知名度はうなぎ登りの様相を呈した (Leeming 186-87)。

ボールドウィン自身がそうなったことで、ほかの著名な文化人との交流も増していく。ポール・マーシャル (Paule Marshall)、ニーナ・シモン (Nina Simone)、ローザ・ガイ (Rosa Guy)、マヤ・アンジェロウ (Maya Angelou)、マックス・ローチ (Max Roach)、アビー・リンカーン (Abbey Lincoln)、ニッキ・ジョヴァンニ (Nikki Giovanni) といったアフリカ系アメリカ人の作家、音楽家、エンタテイナーらである (Leeming 160)。一方で、白人の作家たちとの親交も広がりを見せた。しばしば滞在した一種の芸術家村であるマクダウェル・コロニー (MacDowell Colony) で、1960年にはケイ・ボイル (Kay Boyle) と知り合い (Leeming 173)、1960年の夏に滞在したパリではジェイムズ・ジョーンズ (James Jones) 夫妻やウィリアム・スタイロン (William Styron) 夫妻と多くの時間を過ごした (Leeming 178)。同年秋には西海岸に講演旅行に出かけ、ジョン・チーヴァー (John Cheever) とフィリップ・ロス (Philip Ross) とともに *Esquire* 誌後援の連続講演会をスタンフォード大 (Stanford University)、カリフォルニア大学バークレ

ー校 (University of California, Berkeley), サンフランシスコ州立大学 (San Francisco State University) でこなしている (179)。彼の地では、写真家セオドア・ペラトウスキー (Theodore Pelatowski) との再会も果たす (Leeming 179)。

以上のように頻繁に移動をし、広範な交友関係を持ちながら執筆を続けることは容易でない。1956年には本格的に取り組み始めていた第三長編 *Another Country* 執筆のために、1959年に二年間 12000ドルの補助金をフォード財団 (Ford Foundation) から受けるのであるが、結局同小説を脱稿するのは1961年暮れ、しかも場所はイスタンブール (Istanbul) でのことであった (Leeming 157, 195-96)。 *Another Country* を執筆していた当時、ボールドウィンは常に旅に出ているという風情であった。1957年、マンハッタン (Manhattan) のホレイショー・ストリート (Horatio Street) にアパートを借り (Leeming 148), そこで創作に没頭することもあったが、取り巻きに囲まれて執筆に集中することが困難になると、方々へと出かけていくのだ。マクダウェル・コロニーはそうした避難所の典型例であったが、アメリカの「解毒剤」として足繫く通ったパリでも執筆を続けた (Leeming 178)。また、1961年2月からはコネティカット州の田舎、ロクスベリー (Roxbury, Connecticut) に住むスタイロン夫妻の家に間借りをし、時々の出張を重ねながらも同年7月まで滞在を続けた (Leeming 184-85; Buccola 120-21)。その後、二回にわたるシカゴ出張 (Leeming 184-88), *The New Yorker* にエッセイ原稿を依頼されたイスラエル (Israel) 訪問を経て、 *Another Country* 執筆に集中するためにトルコ (Turkey) へ向かうことを決意する。1961年、10月のことであった (Leeming 190-93)。

トルコはイスタンブールへとボールドウィンを招き寄せたのは、トルコ人俳優エンジン・セザー (Engin Cezzar) の存在だ。ボールドウィンの活動は、創作、エッセイ執筆、公民権運動への関与、著名人としての講演やメディアへの登場と多角化していたのだが、人生の早い段階から持ち続けていた演劇への関心も消えることはなかった。セザーとの出会いは1957年

の秋、南部への取材旅行からニューヨークへ帰ってきたときのことだ。前年56年に出版された *Giovanni's Room* の舞台化の話がアクターズ・スタジオ (Actor's Studio) で持ち上がり、ジョヴァンニ候補の俳優が彼だったのである。二人はすぐに意気投合し、ボールドウィンは舞台化の脚本づくりに携わることになる (Leeming 148)。この経験から、ボールドウィンはさらに演劇界とのつながりを築く。エリア・カザン (Elia Kazan) のアシスタントを務める話が舞い込み、アーチボルド・マクリーシュ (Archibald MacLeish) の *J.B.*、そしてテネシー・ウィリアムズ (Tennessee Williams) の *Sweet Bird of Youth* の上演に携わることになった (Leeming 151)。こうした機会を通じて、ボールドウィンはアフリカ系アメリカ人俳優のシドニー・ポワチエ (Sidney Poitier) と知り合った (Leeming 155)。また、ファーン・マージャ・エックマン (Fern Marja Eckman) は、ボールドウィンが演劇界に身を置いたことは、*Another Country* に登場する俳優、エリック (Eric) の造形に影響を与えたと指摘する (150)。そのような意味で、セザーとの出会いを含むニューヨークの演劇シーンへの接近と *Another Country* の創作には、浅からぬ関係が見出せる。

ボールドウィンの公的露出は、1962年に一層高まり、63年にピークを迎える。1962年の4月には、キャサリン・アン・ポーター (Katherine Anne Porter) らとともに、ノーベル賞受賞者たちを祝すホワイト・ハウスのディナーへと招かれた。その際、その後何度か面会することになるロバート・ケネディ (Robert Kennedy) とも会っている (Leeming 197-98)。6月に出版された第三長編小説 *Another Country* はベストセラーになり、63年1月に出版された第三エッセイ集 *The Fire Next Time* と本小説は、最も「売れた」ボールドウィンの出版物となった (Leeming 205)。*The Fire Next Time* の出版後には、ボールドウィンのテレビ出演がさらに増える (Leeming 219)。

同年後半以降は、作家としてよりもむしろ公民権運動家としてのボールドウィンの活躍が目立つ。妹グロリア (Gloria) との初のアフリカ (Afri-

ca) 旅行, そして二度目のトルコ滞在を経て帰国したアメリカは, ジェイムズ・メレディス (James Meredith) のミシシッピ大学 (University of Mississippi) 入学騒動で揺れていた (Leeming 216)。こうした背景のもと, 63 年初からボールドウィンは CORE のために南部への講演旅行へと出かけるのである。ミシシッピ州を訪れたボールドウィンは, メレディスや NAACP のミシシッピ支部役員を務めていたメドガー・エヴァーズと出会っている (Leeming 217)。ミシシッピ以降, ボールドウィンはニューオーリンズ (New Orleans), ノースカロライナ州ダラム (Durham, North Carolina) やグリーンズボロ (Greensboro) といった南部各地を巡りながら講演を行っていくが, この旅は同行取材が行われ *Life* 誌に記事が掲載されるほどの注目を浴びた (Leeming 218)。さらに, 4 月には, ボールドウィンが雑誌に発表していたエッセイを称えて George Polk Memorial Award が授与される (Eckman 179)。のみならず, *Time* 誌 5 月 17 日号ではボールドウィンの特集記事が組まれて彼の肖像画が表紙を飾り, 公民権運動のスポークスマンとしての彼は一躍時の人となったのである (Leeming 221)。

この間もボールドウィンは戯曲 *Blues for Mister Charlie* 執筆のためのトルコ滞在 (Leeming 219), CORE の講演のための西海岸各都市巡業 (Leeming 220–21)⁴⁾ と移動を繰り返しているのであるが, 1963 年春には, アラバマ州バーミングハムで, キング率いる公民権運動, および警察署長ブル・コナー (“Bull” Connor) らによるその弾圧が激化していた。かたやケネディ政権が公民権運動に十分に介入していないことに業を煮やしたボールドウィンは, 5 月 12 日, 滞在中のロサンゼルス (Los Angeles) より当時の司法長官, ロバート・ケネディに政府の不作為を非難する電報を送っている⁵⁾。5 月下旬, 東海岸に戻ったボールドウィンは, 何の前触れもなくロバート・ケネディよりヴァージニア (Virginia) の私邸に招かれ, 翌日の 5 月 24 日にアフリカ系アメリカ人市民に影響力を持つリーダーを集め, ケネディのマンハッタンのアパートにて会合を持つ旨依頼を受ける (Leeming 222–23)⁶⁾。

ボールドウィンとロバート・ケネディとの面会がどこまで大勢に影響を持ったのかは明らかでないが、1963年夏は公民権運動が一つの到達点を示している。6月11日にケネディ大統領は公民権運動への関与を表明し、後日議会に公民権法案が提出され、さらには8月28日にワシントン大行進が実現した (Leeming 226; Eckman 197)。キング牧師がいわゆる “I Have a Dream” 演説を高らかに謳い上げる。しかし、こうした盛り上がりに対する反動は苛烈化し、9月15日の日曜日にはバーミンガムのアフリカ系アメリカ人の教会が爆破され、少女4人が殺害されてしまう。

こうした情勢のなか、以降もボールドウィンは公民権運動に関与していくのだが、それはあくまでもスポークスマンとしてであって、運動の先導者という役割ではなかった (Leeming 226)。事実、ボールドウィンもワシントン大行進に参加したものの、その際にはスポークスマンとしての役割すら、与えられることはなかった。キャンベルによれば、キングも、ボールドウィンの公民権運動における役割が限定的なものであると認識していた。キングは、自身が主導する運動をボールドウィンが「あまりわかっていない」と発言している (Campbell 175)。公然のものとなっているボールドウィンの同性愛もまた、公民権運動における彼の立場に影を投げかけた。キングのアドバイザーであったスタンリー・レヴィソン (Stanley Levison) は、ボールドウィンは「公民権運動よりも同性愛運動を指導するほうが適任だ」と発言したとされる。人々はしばしばボールドウィンを “Martin Luther Queen” と呼んで嘲笑したという (Vogel 83; Buccola 193)⁷⁾。

以上のように陰口をたたかれることはしばしばあったものの、公の場におけるセレブリティとなったボールドウィンは、他方、家族との絆を深めてもいる。1963年6月に彼はパリ時代からの恋人、友人であるルシアン・ハップスバーガー (Lucien Happersberger) とともにプエルトリコ (Puerto Rico) にむかい、同地で高校時代の友人、写真家のリチャード・アヴェドン (Richard Avedon) と協業して *Nothing Personal* と名付けられた文章付き写真集の取材をしている。アヴェドンが島を去ったのち、彼の地の滞在を

気に入ったボールドウィンは、今度は家族を招待する。8月2日に迎える自身の誕生日祝いという名目であった。この頃までには弟のデヴィッド (David) がボールドウィンの片腕として彼を様々に手助けしていたのだが、プエルトリコでは、家族皆が、妹ポーラ (Paula) が言うところの、「素晴らしい一週間」を過ごした。執筆中の戯曲、*Blues for Mister Charlie* の本読みを家族でやりもした (Eckman 198-204; Leeming 227)。また、ボールドウィンは1964年にマンハッタンのウェスト・エンド・アヴェニュー (West End Avenue) に大きなアパートを購入し、母親や妹のポーラを住まわせるとともに、このオフィス兼住居の管理を依頼したルシアンや妹グロリアに、ビジネス上のマネージメントをしてもらうことになっていく (Eckman 203, 219)。こうしたボールドウィンと家族の関係の深まりは、彼の後期小説群に描かれる家族関係に反映されていると考えられる。

こうしたなか、公民権運動を率いる先導者たちが少しずつ入れ替わっていく。公民権運動の顔であったキングが説く白人との友愛の限界を指摘するマルコム X がより注目を浴び、ボールドウィン自身も次世代の運動家、あるいは文化人たちの攻撃的となっていく (Campbell 182)。そうした例の一人、リロイ・ジョーンズ (Leroi Jones) はブラック・ムスリムに入信してアミリ・バラカ (Amiri Baraka) へと改名することになるが、1963年に発表したエッセイ “Brief Reflection on Two Hot Shots” において公然とボールドウィンを批判するにいたる (Campbell 190-91; Gates, “The Fire Last Time” 40)。1965年2月にはマルコム X が暗殺され、その後頭角を現した若きリーダーが “black power” を唱える SNCC の議長、ストークリー・カーマイケル (Stokely Carmichael) であった。さらなる象徴的な転換点は、1966年6月のジェイムズ・メレディス銃撃事件にあったと指摘される。ミシシッピ州で単独マーチを行っていたメレディスが脚を撃たれたことで、アフリカ系アメリカ人運動家たちの過激化が進む。同年には西海岸で好戦的なブラック・パンサー党 (Black Panther Party for Self-Defense) が結成され、ヒューイ・P・ニュートン (Huey P. Newton)、ボビー・シール (Bobby Seale)、

エルドリッジ・クリーヴァー (Eldridge Cleaver) といったパンサー党の指導者たちにカーマイケルも合流していく (Campbell 217; Leeming 257)。

ボールドウィンは、こうした公民権運動の趨勢を理解して支援を惜しまなかったが、執筆とのバランスを取りながら、少しずつ運動との距離が広がっていった。バラカの場合のように、過激化が進む若いアフリカ系アメリカ人世代からの突き上げがその要因となったのも事実である。そうしたなか、ボールドウィンが関与した公民権運動の注目すべき事例としては、ワシントン大行進の直前にパリで行われた一連のデモ行進や集会がある。ボールドウィンはワシントン大行進にも参加しているのだが、その直前までパリに滞在していた。彼の地在住のアメリカ人たちは母国の首都での大規模な集会開催の予定を聞きつけ、その支援策を模索した。著名な作家兼公民権運動のスポークスマンたるボールドウィンがパリにいることをかぎつけた彼らは彼を探し出し、この計画に担ぎ出したのである (Eckman 207-11)。また、同年 10 月にはセルマ (Selma, Alabama) での SNCC 主導の有権者登録活動に参加している (Leeming 228)。1965 年 3 月、同じくセルマで幾度となく有権者登録デモ行進が試みられて暴力的な弾圧が繰り返されていた。3 月 7 日日曜日の流血事件は特に凄惨を極めたが (Buccola 308-09)、3 月 25 日の行進にはボールドウィンも参加し、フォークシンガーのジョーン・バエズ (Joan Baez) と手をとって歩く姿を映した写真が残っている (Leeming 246)。

この時期のボールドウィンはより強い調子で白人側を非難していく。たとえば、1965 年 2 月にケンブリッジ大学 (Cambridge University) で開催された公開討論会では、相手の保守派の白人論客、ウィリアム・F・バックリー・ジュニア (William F. Buckley, Jr.) を圧倒している (Leeming 244-45)⁸⁾。さらにボールドウィンは、人種問題は黒人側の問題ではなく白人側の問題であり、自身で築き上げた神話に囚われているのだと白人たちにむかって言明していく (Leeming 246-47)。

そうした彼にとって、闘争的な若いアフリカ系アメリカ人たちの動向は、

完全に同調しないまでも、その動機は十分理解できるものであった。1967年の秋にサンフランシスコでニュートン、クリーヴァーと対面していたボールドウィンは、シールとも知り合い、依頼があればパンサー党の集会などにも参加して支援を行った。一方、そのパンサー党の有力者、クリーヴァーは、ボールドウィンと直接顔をあわせる前に、特に同性愛に矛先を向けてボールドウィンを公然と非難していたのである (Leeming 292-93)。クリーヴァーだけではなくリロイ・ジョーンズもまた、特にボールドウィンの同性愛を揶揄する批判を繰り返した⁹⁾。若きアフリカ系アメリカ人作家の筆頭格であるイシュメール・リード (Ishmael Reed) はボールドウィンのことを “a hustler who comes on like Job” と呼んだ (Campbell 264)。ボールドウィンが若い世代に向けたあたたかい眼差しとは対照的に、彼らにとってボールドウィンは、乗り越えるべき壁であり、また自分たちの先鋭を際立たせるためのスケープゴートともなったのである。

公の活動に忙殺されながら、ボールドウィンは各国へ出かけ、そしてさらには執筆の時間を作っていく。1964年には *Blues for Mister Charlie* がブロードウェイ (Broadway) のアンタ劇場 (ANTA Theater) で上演され、ボールドウィンは準備段階からつきっきりでこのプロダクションに関わった (Leeming 232, 238)。プライベートでは、一つの転機が訪れた。ルシアンとの離縁である。事の発端は、1965年初頭、ルシアンが、知り合ったアフリカ系アメリカ人プロデューサーと映画会社の設立を計画したことにある (Leeming 243-44)。自らも巻き込まれたこの計画に、なかなかはっきりとした立場を取れなかったボールドウィンだが、財政状況の悪化を受け、ついにルシアンを解雇するという一歩踏み込んだ対応をとることになった (Leeming 251-52)。ルシアンとの距離を置いたことへの傷心が癒えないままに、ボールドウィンは1965年の暮れに公民権運動から少し離れて執筆に注力すべくイスタンブールへと向かい、第四長編となる *Tell Me How Long the Train's Been Gone* (1968) と向き合った (Leeming 257, 273)。途中帰国や旅行をはさみながら、このイスタンブール滞在は一年半ほどの長期

のものとなる (Leeming 277)。

1967年夏に帰国したのち、また新たなプロジェクトのために、ボールドウィンはカリフォルニア (California) に拠点を移す。アレックス・ヘイリー (Alex Haley) の *The Autobiography of Malcolm X* (1965) をもとに、劇作の企画がボールドウィン、ヘイリー、エリア・カザンの間に持ち上がっていた (Leeming 284)。断続的に書かれたこの戯曲は、1968年に方向転換を迫られる。コロンビア映画 (Columbia Pictures) が『自伝』の映画化の権利を買い上げ、ボールドウィンはハリウッド映画の脚本担当へと横滑りしたのである (Leeming 288)。ボールドウィンは、*One Day When I Was Lost* と名付けたこの脚本の執筆を断続的に進めたが、結局映画会社との折り合いがつかずにこの映画化の計画は頓挫。後日、ボールドウィンが手掛けた脚本は *One Day When I Was Lost: A Scenario Based on "The Autobiography of Malcolm X"* として1972年に出版されるものの、この時点で彼は西海岸から引き上げる。1969年春のことだ (Leeming 299, 301)。

Notes

- 1) *Nobody Knows My Name* 所収の "The Northern Protestant" 参照のこと。
- 2) Leeming による伝記や *Library of American* 版エッセイ集の初出一覧 (857) 等では、ボールドウィンのカラマズー大訪問は1960年2月とされているものの、カラマズー大の関連ウェブサイトの近年の記事によると、ボールドウィンの訪問は60年11月中旬だったとある (www.kzoo.edu/news/building-baldwin/, inclusiveexcellence.kzoo.edu/19-james-baldwin/, www.kzoo.edu/alumni/virtual-k-talk-critical-konversations/)。同大の学生新聞 *Index* においても、ボールドウィンのキャンパス訪問は同年11月16日号の第一面に告知されており、こちらの情報が正しいと考えられる ("Novelist Baldwin Arrives on Campus for Week")。
- 3) ヒューズはハーレム・ルネサンス期から活躍するアフリカ系アメリカ人詩人。ハンズベリーは作家、劇作家。*A Raisin in the Sun* (1959) がアフリカ系アメリカ人女性の作品として初めてブロードウェイで上演された。ケイジンは著名な文芸評論家。カポーヤはボールドウィンの高校時代の友人。ヘントフはジャズ評論家。

- 4) 西海岸滞在中に、ボールドウィンは *Take This Hammer* と題されたドキュメンタリー映像作品に関わった。サンフランシスコ (San Francisco) を歩き感想を述べる、あるいは街の人々と会話を交わすボールドウィンの姿を取めた作品である (Pavlić 23, 27–35)。
- 5) 電報の全文はエックマンに引用されている (180)。
- 6) ボールドウィンが集めた人々は以下を含む。歌手で俳優のハリー・ベラフォンテ (Harry Belafonte), 同じく歌手で俳優のレナ・ホーン (Lena Horne), 劇作家のロレイン・ハンズベリー, 心理学者ケネス・クラーク, 俳優のリップ・トーン (Rip Torn), シカゴ都市連盟 (Chicago Urban League) のエドウィン・ベリー (Edwin Berry), キングの知人である弁護士のカラレンス・ジョーンズ (Clarence Jones), フリーダムライダーのジェローム・スミス (Jerome Smith)。5月24日の会談はエックマンに詳細が記されている (187–94)。
- 7) ワシントン大行進に参列はしているものの、ボールドウィンがスピーチ等を任されることはなかった。ジョゼフ・ヴォーゲル (Joseph Vogel) は、これを、ボールドウィンのセクシュアリティや「女性的な」立ち居振る舞いに起因する、ボールドウィン評価の凋落の一つの徴候であるとしてとらえる (76)。そのほかの理由としては、ボールドウィンが原稿に則らないで予期できない発言をすることが恐れられていた、あるいは、ボールドウィンが「詩的な誇張」に走りがちであるといった周囲の懸念が指摘されている (Buccola 205)。
- 8) このディベートについてはブコーラ (Buccola) が詳しい。ディベートが実施されることになった経緯については6章を参照のこと (特に p. 231–)。同書には、ディベートのトランスクリプションも収録されている。また、二人はもう一度テレビ番組の *Open End* で議論をしている (Buccola 328–35)。
- 9) クリーヴァーやジョーンズは、公の場でボールドウィンを批判するも、後年には内々に彼に支援や援助を求めている (Pavlić 73, 168–69)。

参考文献

- Baldwin, James. *Collected Essays*. Library of America, 1998.
- Buccola, Nicholas. *The Fire Is upon Us: James Baldwin, William F. Buckley Jr., and the Debate over Race in America*. Princeton UP, 2019.
- Campbell, James. *Talking at the Gates: A Life of James Baldwin*. Viking, 1991.
- Eckman, Fern Marja. *The Furious Passage of James Baldwin*. M. Evans, 2014.
- Gates, Henry Louis, Jr. “The Fire Last Time.” *New Republic*, vol. 206, no. 22, 1 June 1992, pp. 37–43.

———. *Life upon These Shores: Looking at African American History 1513–2008*. Knopf, 2011.

Leeming, David. *James Baldwin: A Biography*. Henry Holt, 1994.

“Novelist Baldwin Arrives on Campus for Week.” *Index*, 16 Nov. 1960, p. 1. CACHE Digital Archive, hdl.handle.net/10920/18955.

Pavlić, Ed. *Who Can Afford to Improvise?: James Baldwin and Black Music, the Lyric and the Listeners*. Fordham UP, 2016.

Vogel, Joseph. “Decline of Reputation in the 1980s.” *James Baldwin in Context*, edited by Quentin Miller, Cambridge UP, 2019, pp. 76–89.